

【図書紹介・資料紹介】『ふくおか子ども白書2021：子どもの声が社会を変える』編集 ふくおか子ども白書2021編纂委員会 発行 特定非営利活動法人子どもNPO センター福岡

宮嶋, 晴子  
九州女子短期大学

<https://doi.org/10.15017/6796413>

---

出版情報：生活体験学習研究. 22, pp.53-55, 2022-07-30. The Japanese Society of Life Needs  
Experience Learning

バージョン：

権利関係：

# 『ふくおか子ども白書2021』

— 子どもの声が社会を変える —

編集 ふくおか子ども白書2021編纂委員会

発行 特定非営利活動法人

子ども NPO センター福岡



本書は、特定非営利活動法人子ども NPO センター福岡（以下、子ども NPO センター福岡）子ども白書2021編纂委員会（以下、編纂委員会）の編集により、2011年より3年おきに発行してきた「ふくおか子ども白書」の4冊目、2021年に発行された「ふくおか子ども白書2021 — 子どもの声が社会を変える —」（以下、子ども白書2021）である。それまでの3冊のテーマは、2011年「子どもをめぐる状況・活動・課題」、2014年「子どもに生きる喜びと希望を育む絆づくり」、2018年「『子どもにやさしいまち』を目指して」であり、4冊すべてにおいて権利主体である子どもを前提に、時代や社会の動向にみる子どものリアルをとらえている経緯がある。

その流れの中で発行された本書「子ども白書2021」は、さらに特筆すべき内容が加わっている。それは、2020年2月頃から突然始まった世界的な新型コロナウイルス感染拡大という状況において、いち早く子どもの目線からコロナ禍をとらえる調査や研究に取り組み、その内容を盛り込んでいるところである。執筆者は、

59人に及んでおり、3つの特集と9つの章から構成されている。

本学会の学会誌でこの「子ども白書2021」を取り上げようと思ったのは、コロナ禍が地域における子どもの活動にもたらしている影響、社会的養護の子どもたちにもたらしている影響などについて子どもの生の声を集め現状をとらえようとするなど、多面的に子どものコロナ禍の生活状況をとりえ分析を試みていることから、コロナ禍も含めた子どもの生活体験学習を考えていくうえで、多くのヒントが得られるのではないかと考えたからである。

ここで、まずこの本を発行している「子ども NPO センター福岡」について紹介する。この NPO 法人は、2004年に「市民の〈つながり〉と〈協働〉でめざす『子どもにやさしいまち』の実現」をミッションに設立され、4つの事業、①子どもにやさしいまちづくりひろば、②子どもと NPO の調査・研究・子ども白書づくり、③子どもサポート事業、④ NPO サポート事業、に取り組む NPO 法人である。役員には、それぞれ子どもや子育てなどの活動団体に関わる市民活動家、弁護士、研究者、地域活動実践者、マスコミ関係者によって構成されており、子どもや子育ての実践とその実践研究のシンクタンク的な役割を担っている団体と見ることができる。

そのような NPO 法人が作成した「子ども白書2021」の「もくじ」は以下の通りである。

はじめに

特集Ⅰ 新型コロナと子ども

特集Ⅱ 子どもの声が問いかけるもの

子どもの権利と QOL、及びコロナウイルスに関する実態調査から

特集Ⅲ 子ども最前線

子どもアドボカシーシステムの実現に向けて

第1章 子どもと福祉

第2章 子どもと家庭

第3章 子どもと学校・子どもと教育

第4章 子どもと医療

第5章 子どものメディア環境と健康（からだ）

第6章 子どもと地域

第7章 子どもと環境

## 第8章 子どもと文化

## 第9章 子どもと権利保障

具体的内容「特集Ⅰ 新型コロナと子ども」は、4つの原稿で構成されている。まず1つめの内容では、「コロナ禍の子どもの市民活動と今後に向けた調査」というタイトルで、福岡県内で子どもに関わる市民活動をしている34団体を対象に「団体からみたコロナ禍が子どもにもたらした影響、団体がコロナ禍で行った行動、団体がコロナ禍で行えなかった行動、連携・協働すればできるかもしれないアイデア」を聞き取り、子どもの権利からみたコロナ禍の影響という視点からまとめられている。

2つめと3つめの内容「社会的養護の子どもたちが経験したコロナ禍」と「コロナ禍は、社会的養護の当事者ユースにどう影響を与えたか～IFCA『PROJECT C』による生活への影響調査から～」では、社会的養護の当事者または経験した若者、また施設や里親関係者を対象に調査を実施し、コロナ禍がもたらした子どもへの影響を浮かび上がらせながら、必要な支援の提言、またNPO法人自ら立ち上げたプロジェクトについての内容がまとめられている。

4つめの内容「子ども座談会『聴かせて きみのキモチ』」では、小学5年生から中学2年生までの6人の子どもたちと特定非営利活動法人チャイルドライン「もしもしキモチ」代表理事による座談会の記録がまとめられており、それは、子どもたちのコロナ禍の学校や家庭に対する不満や悲しみ、また疑問や要望などが率直に語られている「子どもの声」の貴重な資料といえる。

続いて、「特集Ⅱ 子どもの声が問いかけるもの子どもの権利とQOL、及びコロナウイルスに関する実態調査から」では、大きく3つの内容についての調査結果がまとめられている。1つめは、「『子どもの権利』に関する認識や実現度」、2つめは、「子どものQOL（ここでの調査項目は、先行研究を参考にして「身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友だち、学校生活」について）の実態」、3つめは、「コロナ禍における子どもの生活について（ここでは、「困っていること、不安なこと、良かったこと」）」であり、いずれも「子どもの声」の状況分析を中心に調査結果がまとめられている。

次に、「特集Ⅲ 子ども最前線 子どもアドボカシーシステムの実現に向けて」では、福岡市で子どもNPOセンター福岡が取り組んできた「子どもアドボカシー事業」の蓄積を財産に、福岡市との連携による「子どもアドボカシーセンター」の実現に向けた取り組み経緯がまとめられている。内容では、子どもアドボカシーを「めぐる情勢、理念と枠組み」を踏まえ、「人材養成、システム研究等、子どもNPOセンター福岡の実践」とともに、「課題」への問題提起がなされている。

最後は、子どものよりよい育ちを目指した環境、テーマ、生活状況等について9つの章「福祉、家庭、学校・教育、医療、メディア環境と健康（からだ）、地域、環境、文化、権利保障」の視点からまとめられている。そこでは、各章がさらに6本から10本（コラムを含め）の小論で構成され、単なる現状分析や課題の指摘に留まらず、具体的活動実践やこれからの方策、さらに社会への世論形成や国への制度改善の提言にまで至った内容となっている。

思えば中世まで「大人の所有物」とみなされてきた子ども観は、ルソーの「子どもの発見」やアリエスの「子どもの誕生」を経て、現在、「権利主体としての子ども」（谷田貝、2018）という子ども観に到達している。本書は、どの特集どの章においてもこれら「権利主体としての子ども」を前提に、理論と実践がまとめられている。

では本書から本学会では何を受け取り、生活体験学習の研究や実践を進めていくべきか。子どもの発達段階や人の生活文化からの理論や実践を与えたり修得させたりするという発想だけではなく、現在〈いま〉を生きる子どもの声や姿から権利主体としての子どもであることを尊重していくことによって、子どもとの信頼関係が生まれ、そこから、子どもの意欲が芽生え、子どもの自らが生活体験学習活動を「やってみたい」という気持ちが生まれ、豊かな生活体験学習活動のはじめの一步を踏み出すことが出来るのではないかと考えた。

最後に読み終えた感想は、急激に変化する時代や現在の状況下における子どもの育ちを踏まえつつ、軸足は本書のテーマにある「子どもの声」であり、それをもとに「研究と実践に取り組み」「社会を変える」ことが見通せる内容であり、まさにテーマ名「子

どもの声が社会を変える」が体現出来る本だと言える。ぜひ多くの人に読んで欲しいと切に願う。

[特定非営利活動法人子ども NPO センター福岡、  
2021年、書籍2,000円(税込)、電子版1,000円(税込)]  
(九州女子短期大学 宮嶋晴子)